



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)関東

文は信なり

No.34

薰風号

定価 100円

発行責任者

本部代表・三浦喜代子

JCP 事務局

〒131-0043

墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-61838

HP: <http://jcp.daa.jp>

特集 心に残る一冊

未知の世界を覗く

駒田 隆

「なくて七癖」と言いますが、わたしには幾つもの癖があります。その一つが、何か書くときに、その主体となるものの資料を集めることです。今、書き出したこの諺についても、『岩波・ことわざ辞典』を引いて確認して書き始めました。

江戸初期の頃には、「難なくして七癖」と言っていたのだ、と知りました。また、他の辞書には、『紫式部日記』に「必ず癖は見つけらるるわざに侍り」とあるのを知ったり、「癖ある馬に能あり」という諺のあるのを見て、わたしの癖の多いのも少しは能ある証拠かな、と思ったりして一人で微笑んでいます。

わたしにとって、何かを書くというのは、まず資料集めなのです。

人物論を書くとなると、常識的には知っていても、その人物の生涯や成果物を書いた資料を探しだし、事実在即して書くことを心がけます。

また、「信望愛」のテーマに基づく文などは、聖書の注解を見ることも当然ですが、識者（研究者、信徒も問わず）の意見も探します。それらの上に、自分のささやかな経験や考え方を乗せて纏めていきます。

わたしにとって、神保町の古本屋さんは、宝の山なのです。もつとも今は、パソコンで古本を見つけることも可能なので、随分資料集めは楽になりました。資料が集まれば、あとはその纏めです。そのためにはまた、日本語の表現方法も考えねばなりません。

作文のしかたなど、いろいろな指導書が出ています。でも、基本的には、「起承転結」が大切なのではないでしょうか。あとは、その書くテーマに沿って展開する表現方法でしょうが、わたしはもっぱら、口語体を使います。これも、文章の柔らかさを求めていることです。

こういったことで、わたしの本棚は、その時のテーマで集めた本で溢れています。思想に凝った時の『キルケゴール全集』があるかと思えば、『太宰治全集』もあり、天井まで作った本棚も満杯で、その前に何段か置くようになり、部屋を圧迫しています。

今、パソコンを使っている机の上も、何種類かの聖書注釈書が重なっており、探すのに慎重にやらないと崩壊の危機です。

重複して買い求めてしまうのは、年中行事です。それでも楽しいものです。

未知の世界を覗くことは、

知らないことは、素晴らしいことです。知る望みがあるのですから。

【目次】P1 駒田隆 P2~P3 志田雅美・長谷川和子 P3 長谷川和子・島本耀子 P4 榎尚子・山本披露武 P5 三浦喜代子・土筆文香 P6~P7 土筆文香・榎尚子・三浦喜代子 P7 三浦喜代子・安東奈穂美・土筆文香 P8 余滴・編集後記・JCPのPR

先人の信仰に励まされて

志田雅美

わたしのとっておきの一冊は、F・B・マイヤー(フレデリック・ブローザートン・マイヤー)の著書『神のしもべモーセの生涯から』である。マイヤーは一八四七年にイギリスのロンドンに生まれたバプテストの牧師で、英国の大西洋側内陸都市の宣教に加わった伝道者である。

物語は出エジプト記に沿ってモーセの生涯を追っていく。神の召命からピスガ山上で死に至るまで、数々の試練に遭い、孤独と苦悩に苛まれ、それでもなお神に忠実に従い、神と共に歩んだモーセの生涯が著者の視点から詳細に記されている。その中にこんな一節がある。

『神が私たちを緑の園に置かれるか、それとも、砂漠に置かれるかはさして問題ではない。外側の環境に欠けているものを、神はご自分の富によって埋め合わせる責任をお持ちである。なつめやしの木がなかったらどうなるのだろうか。そんな時は、全能者の陰が私たちを炎暑から守る隠れ場となるに違いない』

これは、イスラエルの民が麗しの地エリムを後に、シンの荒野へと向かう場面での著者の言葉である。わたしはこの一節に心を奪わ

れた。今からおよそ十年前、洗礼を受けたばかりの頃のことである。

その頃のわたしは、まだ世のご利益信仰から完全に抜け出せず、全知全能の創造主なる神を信じてでも全く変わらない不遇な環境に絶望していた。そのうえ、これまで気にも留めていなかった自分自身の小さな罪に敏感になり、平安とは言い難い日々を過ごしていた。そればかりか、信じるだけで救われている人や、悩みの渦中にあつても微笑みを絶やさぬ人に違和感を覚え、自分だけが取り残されてしまったような孤独も感じていた。そのような時、この言葉がわたしを慰め、信仰の土台ともなるべく気づきを与えてくれたのである。先人の、時を経ても色褪せない力強い信仰に励まされた。そんな思いであつた。

以来、わたしはたびたびこの本を開いては、慰めと励ましと勇気をいただいている。わたしも、ペンを執つて神のすばらしさを証しする恵みを賜つた者として、微力ながらも人々に勇気を与えられる者でありたい。そして、『緑の園にしようとも、砂漠にしようとも、神の恵みはわたしに十分である』と心から言える信仰者でありたい。

マイヤーの本は、わたしに志を与えてくれた大切な本のひとつである。

マザー・テレサの愛の手

長谷川 和子

PHP研究所出版の『世界で一番たいせつなあなたへ マザー・テレサからの贈り物』を読んだ。著者は片柳弘史氏、私が住んでいる隣町の上尾市出身。一九九四年、二三歳のとき人生の道に迷い、生きてゆくための手がかりを模索していたとき「マザーに会えばきっと何かがわかるにちがいない」とリユックを背負い、コルカタ(旧カルカタ)に出向いた。マザーは久し振りに帰つて来た孫のように温かく迎えてくれた。本著はそこでボランティア活動に参加した回想録である。

やがてマザー・テレサから「神父になるように」勧められてイエズス会に入会。二〇〇八年に上智大学院神学研究科を修了。現在山口県宇部市教会の神父である。

私は、マザー・テレサの本を何冊も読んでいたが、この本を通して真のマザー・テレサを知らされた思いがした。「私こそ世界で一番マザーから愛されている」と、マザーに出会った人たちは口をそろえて言う。たった五分だけしか会ってない人でも……。それはなぜか。

「たくさんの人が訪ねてきますが、私にとってはそのとき目の前にいる人が私のすべてで

「す」とマザーは言う。相手がだれであっても、目の前にいる人を愛す。だから会った人は、世界で一番マザーから愛されている」と思うのだろう。

ある日、夫のアルコール中毒で暴力を受けていた女性が自殺を考え「死ぬ前に憧れのマザーに会ってから」とインド行きの飛行機に乗ってオーストラリアから訪ねてきた。多忙ではあったが、マザーは時間を取り、彼女の手を握り、笑みを浮かべながら一時間ほど話を聞いた。その女性は「死ぬのはやめた。私のことを大切にしてくれる人が一人でもいるのなら死ぬのはもったいない」と生きる力を取り戻したのである。マザーは「命を大切に」と説教はせず笑顔と力強く握り締めた手のぬくもりで愛を伝えた。

コペンハーゲンのトルパルセン・ミュージアムにあるキリスト像は両手を上げて神を仰ぐ像でなく、腕は斜め下に向けられている。マザーもこのように「さあ、お話しください」と両手をひろげ相手を包み込む仕草をしたのではないか。

マザーの数々の言葉は、神に祈り、神の愛から紡ぎだされたものではないだろうか。慈悲深い言葉にふれる度に感動に包まれ、心が温かくなるのである。

ないないない国

島本耀子

敗戦の日を過ぎて涼風が吹き始めても未だ、帰宅を待たされていた学童疎開先へ、その本は送られてきた。戦時中は子供向きでも戦意高揚を目的としたものばかりだったが、それは地味な装幀ながら、しつかりとした厚みで読み応えがあった。『ないないない国』とは、どこにもない国のお話だと、姉の添え書きがある。

両親が出かけて留守の夜、窓から飛び込んできた少年に誘われて、三人の姉弟がいないない国へ飛び立っていった。その国はネバールランド。少年の名はピーター・パン。いかな名作であっても、敵国の少年が主人公の童話など、戦時中は出版を許されるはずがない。言論統制の束縛から解き放たれた途端に、世に出た本であった。

「昔々あるところに」で始まるおとぎ話とはまるで違う世界に、たちまち私は引き付けられた。この自分が、このままの姿で自由に空を飛べたらどんなに嬉しいことか。多くの子供たちがこの夢を果たそうと試みたに違いない。後に絵本になり、舞台化されもしたが私は見ていない。夢は夢の中で見るのが、最高

の世界なのである。

『ピーター・パン』は、本によっては少し訳が違っていたが、基本は変わらない。何度も気軽に買った文庫版は、孫たちに与えたり他人に貸したりして、今は一冊も手元にない。もう一度手に入れることが叶うなら、『ないないない国』の表紙で読んでみたい本である。

ピーター・パンは大人になりたくなくてネバールランドに留まっている。乳母車から落ちてネバールランドに行った赤ちゃんは成長しても永久に少年である。いつまでも子供のままで居たいのは、大人の気持ちの反映でもあるだろう。声変わりをする前の男の子のおしゃべりが、小鳥のさえずりの様で楽しかったのを私は思い出した。

終盤近く、海賊の親分フックが宿敵のピーターに仕掛けた毒薬を、ティンクが遮って飲んでしまう。死にかけたティンクを救うために、ピーターは夢の中の子供たちに「妖精を信ずる人は手を叩いてください」と、呼び掛ける。たくさん拍手に、ティンクの命は救われる。

どこにもなさそうな夢の中の世界で、その夢を武器に、作者はそこに生きるものを躍動させている。対象は何であれ、「信ずる」ことの効果を考えさせられる表現であった。

『祈りのともごび』 平野克己編

榎 尚子

いつも祈っている、と言ってもよいと思う。

教会で家庭で職場でだけではない。一人で言葉にならない思いを神様につづけている。教会で仲間と共に祈る時は孤独から解放される。

本書は二千年にわたる祈りが集められている。学校の歴史で習った人から教会で聞いた信仰者まで。音読してみると言葉が膨らんでくる。いつの間にか自分の祈りになっている。

『教えてください、ああ神さま／息の詰まるような自己反省によって／自分を拷問にかけるのではなく／自分の目のもとで自分を殉教させるのではなく／信仰の中で深く呼吸をすることを／我らの主、イエス・キリストによって』 (キルケゴール)

祈りたいことがたくさんあるのに、どう祈っていいかわからないことがある。

最近、思いがけない苦難の中にある友にこの詩を紹介した。今の自分にぴったりの詩だと言われた。

聖書に慰めと励ましをいただいている私たちは、信仰の先達や友から多くの力をいただいていた。言葉が神様に用いられたのだ。私たちのあかし文章も思い掛けないところで神様の栄光を表すことができますように祈ろうではないか。

『塩狩峠』は神様の呼びかけ

山本披露武

一冊の本が人生を変えることがある。その一冊に出会ってしまった。

北海道出張の時であった。羽田空港で搭乗時間を気にしながら、空港内の書店で本を探していると、『塩狩峠』という題が目に留まった。適当に開くと、「北海道」、「鉄道馬車」、「明治」という字がある。その三つの言葉で、

うん、これは明治の初め、鉄道建設のために北海道に渡った青年技師の「大ロマン小説」にちがいないと勝手に思い込みその場で買った。

離陸後、ベルト着用のランプが消えるのを待って本を開くと、冒頭に、『一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし』(ヨハネ一・二・24)とあるので、がっかりしてしまった。

しかし他に読む本はなく読みだしたが、永野信夫という人の少年時代の事が長々と書かれていたばかりでも続けて読む気にならず、機を降りる時に忘れたふりをして座席に置いていくことにした。

ところが親切な人がいて、「忘れ物ですよ」といって持ってこられてしまった。仕方がない。「ありがとうございます」といって受け取り、札幌行きのバスに乗りこんだ。

ところが、札幌までの時間が長く、また『塩狩峠』を読むことになってしまった。それで

も、読み進んでいるうちに少しだが、興味が持てるようになってきた。と、いつても、もっと読みたいというほどではなく、バスを降りた後はすっかり忘れてしまっていた。

札幌に着いて、会社の営業所に入った時はすでに五時を過ぎていたので、翌日からの打ち合わせだけをしてホテルに入った。

夕食は外でと思い、大通り公園の近くをぶらぶら歩いていると、キリスト教の宣伝カーが、『私たちが神を愛したのではなく、神が私たちが愛し……』といいながら、追っかけるようにしてやってきた。

また、キリスト教だ。今日はいいたい、どうなっているんだ？ もしかしたら、ほんとうの神様の呼びかけではないだろうか。神様が『塩狩峠』を最後まで読みなさいと言っておられるのだろうか。

車が通り過ぎていくのを見送りながら、食事もそこそこに、急いでホテルに帰った。読了したことは言うまでもない。

もし、それらのことがなかったら、クリスマスチャンとして教会生活をし、「あかし文章」にまで熱中する私はいない。

読書の入り口

三浦喜代子

父の勤め先の社長さんを私は「おじさん」と呼んだ。会社と社宅はすぐ近くだったので、おじさんとはときどき私の手を引いて銀座へ連れて行つてくださった。会社は歌舞伎座の裏通りを築地へ向かう木挽町にあった。家族的な小さな会社であった。そのころはまだ東京に空襲が無かった。

おじさんはよく絵本を買ってくださった。それが、うれしくてうれしくて、昭和通りとび跳ねながら渡った。たしか「フランダーズの犬」もあつたと思う。ネルロがかわいそうで、読んでもらうたびに大泣きした。その悲しみが今でも残っている。

終戦の年の秋に、私たち家族は母の里へ疎開した。しばらくして、戦争中は閉鎖されていた会社が再開すると、父は単身赴任した。昭和二四年秋には私たちも東京へ戻った。家は父の自家のそばの墨田区。四年生だった。

ある時、私は熱を出して遠足に行けなかった。寂しい思いをしていた。母が、枕もとに本を置いてくれた。慰めにと買ってくれたのだ。うれしくてうれしくて、腹這いになって読みふけた。残念ながら本の題名は覚えていないが、絵本ではなかった。

それ以来、病気になるれば本を買ってもらえるんだと思うようになった。風邪を引けばいいんだ。熱が出ればいいんだ。

ああ、病気になるたいなあ……。

わざと病気のふりをしたかったが決行できず、あいにくその後は学校を休むようなことは起こらなかった。

おそろおそろ本屋さんに入って、お店の人を気にしながら本の背を眺めまわすこともあった。臆病だったのか読みふけることはできなかった。

五年生の新学期が始まって、女性の先生が新しい担任になった。

「これから学級文庫を作ります。毎月二冊新しい本を増やしていきます。みんなで仲良く読みましょうね」

先生はいくつかのきまりを説明された。

——休み時間に読むこと、外に持ちだしてはいけない、家に持って帰ってはいけない、独り占めにしてはいけないことなどを——。

私にだけ言われた気がして、ドキドキした。すぐにでもルール違反しそうだったから。

こうして『少年少女世界名作全集』が魅惑に満ちた読書世界の扉を開いてくれた。

生涯の一冊『聖書』との出会いは、なお数年先のことになる。

『あさつての風』に出会って

土筆文香

三浦綾子のエッセー集「あさつての風」に出会ったのは二二歳のときだった。この本を読んだことがきっかけでキリストを信じるようになった。

そのころ、わたしは幼稚園に勤めていた。子どもに押し付けるような保育のあり方に疑問を抱き、大きなストレスを抱えていた。

また、家庭では母との関係がよくなかった。母と顔を合わせる時間を短くするため、駅前で夕飯を食べて帰ったりした。それでいて寂しく、何でこんなところでひとり食事しているのだろうと涙を流していた。

そんなとき立ち寄った本屋でみつけたのが「あさつての風」だった。坪井栄の童話「あしたの風」を思い出し、これも童話だと勘違いして買い求めた。子どもたちにお話をしようと思ったのだ。

童話ではなかったが、読んでいくうちに心が文章にびったりと寄り添ってきた。作者の三浦綾子はクリスチャンらしいけれど、信仰を押し付けたりしないところが気に入った。

三浦綾子は戦前教師をされていたので、子どもの教育について関心をもっておられた。本の中には「教師にとって必要なものは権威

以上のものである。権威以上のもの、それは愛である。愛こそが、相手の胸を打ち、人を育てる。(略)愛を学ぼうとするとき、必ず人間の愛の限界に突きあたるのではないだろうか」と記されており、はっとさせられた。人を愛すると言って、結局愛しているのは自身であることに気づかされたのだ。

「あさつての風」のあと、教育をテーマにした小説「積木の箱」を読み、自分の罪に気づいた。そして、苦しくなつて教会を訪れたのだ。

そのころのわたしは、すごく高慢でいつも自分が正しいと思つていた。

社会の問題も、職場での問題もすべて人のせいにしてきた。そんなわたしが自分の罪に気づいたことは、奇跡としかいいようがない。神様が本を通してわたしの心に触れてくださったのだ。あるとき三浦綾子の本に出会わなければ、わたしはどうなつていただろう……。

三浦綾子が夫の光世氏と共に祈りながら書いたという本。神様は確かに祈りを聞いてくださった。わたしも今、祈りながら書いています。

(「あさつての風」は、現在単行本では発行されておらず、三浦綾子作品集十七の中に収録されている)

『キャラハン邸物語』

榎 尚子

舞台は南北戦争直後のアメリカ、若い青年が主人公です。明治の世になって多くの宣教師が日本に来ました。その中の一人、ウイリアム・キャラハン宣教師は大分県中津で若い妻と共に伝道の種蒔きをはじめました。そのころの日本人にキリスト教はどう映つたでしょうか。

報われることの少ない地道な伝道の日々でした。キャラハンは伝道の拠点に宣教師館を建てました。神様に奉げる最高の建物でした。生後間もない長男を天に送つた夫妻に日曜日の朝が来ました。主の日はたとえ何があるうとも礼拝で説教をする、そんな厳しい日から数年たつて、宣教師館では多くの恵みを用意されていたのです。

もし心の故郷になる風景を「原風景」と言うなら、キャラハン邸は百年の間、そこにかわつた人々の故郷でした。魂に語りかける建物でした。百年たつた今、保存されています。時を超えて今なお語りかける建物です。私にとつて原風景は何でしょうか。私の家は教会の隣です。朝窓を開けると、朝日を浴びて銀色に光る十字架が目飛び込んできます。私の信仰のよりどころは何かを考えさせてくれた本です。(保坂康夫著・三修社)

山口玲子著『とくと我を身たまえ』

若松賤子の生涯

三浦喜代子

若松賤子は、児童書で有名な『小公子』を日本で最初に翻訳した文学者、また、教育者である。本著は賤子の出生から三一歳の若さで天に召されるまでの生涯を、膨大な資料や取材を通して丹念に綴つた伝記である。

《天に召されるまで》と言つたのは、賤子はキリストの信仰に生きた熱きクリスチャンなのだ。日本初の米国女性宣教師メアリー・エディ・キダーの寄宿学校(現在のフェリス女学院)で生活し、信仰に導かれた。

明治一〇年、一三歳で、日本最初のプロテスタント教会である横浜海岸教会で洗礼を受けた。

本著のタイトルは、賤子が明治二二年七月一八日、同教会で、後に明治女学校校長として活躍する巖本善治との結婚式の際に、新郎に贈つた英文の詩の一節である。

Well, take this white veil and
look at on me (この白きヴェールをとりて
とくと我を見たまえ)。延々と続く英詩の中で、賤子は自己の情と意志を率直に吐露している。賤子は寝言も英語だったと言われるほど、英語で考え、行動し、書いたひとであり、心身アメリカ精神に馴染んでいた。ところが、

ンネーム若松賤子にあるように賤子は徳川の親藩会津若松の人である。維新に先立つ四年前に生まれ、四歳で会津戦争の戦禍を潜った。会津と言えば『ならぬことはならぬ』の家訓で有名である。その会津魂の娘が落ち着いた先が外国人で賑わう横浜であったとは、神の数奇な御手のわざ以外にない。

賤子の賤は神のしもべ、神婢を意味し、神一辺倒の敬虔な信仰心の総括である。(著者のことば) 著者山口氏は資料や賤子自身の作品の合間にその生涯を小説のように物語っている。時に賤子の心情に肉薄する。

母が銃弾飛び交う火煉地獄の城下の隅で妹を出産することや、賤子が四人目の子を宿したまま明治女学校の火災に遭い、数日後に亡くなる場面は涙を抑えることができない。

私は先ごろ、日本初の女医、荻野吟子の生涯を『利根川の風』にまとめた。途上で若松賤子を知った。吟子も賤子も明治初期の女性差別色濃い時代の中で、命がけて偉業を進めるとともに、命がけて信仰を貫き、一人の人間として女性として、凛と生きた。世の中はその偉業を讃えることはあっても信仰は表面に出さない。それが、残念でならない。

不平等な時代に信仰と使命を貫いた隠れた女性たちを探し出し、福音の光を当てて紹介していきたいと願わずにはいられない。

子どもの幸せとは 安東奈穂美

長女が幼い頃、『みしのたくかにと』(松岡享子作)という児童書に出会いました。

おばさんが戸棚の隅で見つけた種をまき、「とにかくたのしみ」と看板をたてます。

この国の王子は、朝から晩まで勉強に追われ、唯一の楽しみは時々馬車で外に出ることでした。ある時、看板を見つけ、「みしのたくかにと」と逆に読み、心に残った様子です。

王子は日々の生活に疲れ、食事もとらなくなりですが、「みしのたくかにと」なら食べると言います。大臣達が調べ、ようやくおばさんにたどりつきます。

おばさんは、王子の生活の問題点に気づき、「みしのたくかにと」を食べるための条件に動きやすい服装や外で遊ぶことなどを指示しました。王子は、ようやく子どもらしい生活ができ、生気を取り戻すのです。

この本を読んだ頃、自分の子育てに不安がありました。のびのび育てたいのに、実際は自分の思い通りにしようとして、娘を苦しめているのでは、と。王子の苦しみ、悲しみが心に迫ってきました。

子どもを大らかに見守り、自由に遊ばせたい。楽しいお話であると同時に子育てのバイブルとなった本です。

ネット読書会 土筆文香

ネット読書会は二〇〇六年から始まった。ドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』が最初なので、『カラマゾフの会』と名付けられた。SNSを利用して感想などを書きあった。メンバーは友人、知り合いの友人など十名ほど。読書会の主旨は、「ひとりで読むのが困難な本を励まし合って読破する」。

ついていけないか心配だった。何しろわたしは遅読である。子どものころからのくせで、本を読みながら続きを想像して、心がとんでもない方へいってしまいう。立ち止まって読み返したりするのでなかなか進まない。

それでも「遅読も必要」と聞いて参加した。年に一〜二作品を読むのだが、四巻もあって大変なときもあった。けれども「次はフランスへの旅に出発です」と旗を振り声掛けし、気遣ってくれたツアコンさんと、励ましてくれた仲間のおかげで読破できた。

この九年で読んだ本は、『カラマゾフの兄弟』『エデンの東』『クオ・ワディス』『レ・ミゼラブル』『戦争と平和』『コンラッド』『白痴』『悪霊』『デイヴィッド・コッパフィールド』『純愛』『従妹ベット』『トニオ・クレイゲル』である。ひとりなら出会えなかった本、読破できなかった本。これらがわたしの宝物となった。

余 滴

本のついでに思い浮かぶのは図書館ではないだろうか。老いて図書館に楽しみを見出す人は多い。近年、身近な地域にも意外なほど立派な図書館がある。予約すれば自分だけのスペースが借りられる。ちょっとした書斎である。新鮮な気分です。読書でき、忘れられない一冊になる。

世界最古の図書館はアッシリアの首都ニネベにあったアッシュールバニパル宮廷図書館で、BC七世紀ごろ建設された。蔵書は楔形文字の粘土板。建物は跡形もないが、発掘された多数の粘土板が大英博物館に保存されている。

古代でいちばん有名なのはエジプトのアレクサンドリヤの図書館であろう。こちらは紀元前四世紀ごろに建てられ、七十万巻ものパピルス製の巻物を蔵していた。が、度重なる戦火のためにすべてが焼失してしまったそうである。

図書館の歴史は驚くほど長い。時の権力者たちを初め、人々は書いてそれを残したかったのである。書くとは人間に与えられた本能といえる能力であり欲求なのかもしれない。そもそも神ご自身がシナイの山頂で石の板に戒めを書き、モーセを通して愛する民に与えられた。モーセもイザヤもエレミヤも書きに書いた。古文書も絶版物も図書館に行けば現物を閲覧あるいは触れることができる。流行りの電子書籍よりずっと本物の滋味がある。(K・M)

編集後記

☆戦前から続く高校に入って図書館の規模に感動した私は、そこにある本を読破したいと、本気で思い、挑戦した時期がありました。ほどなく興味を持てるものとそうでないものがあることに気が付きました。／夢中になれるものは小説のたぐい。寝食を忘れるほど熱中、没頭しました。／老いてきて、紀行文や、エッセー、詩歌、評論も読めるようになり、私の小さな読書世界は今ごろになって広がり深まってきています。時間に余裕のできた今、私は図書館へ通う新しい道を歩きはじめています。／「心に残る一冊」がこれからも生まれそうです。(K・M)

☆欠乏時代に育ち、新しい本はきょうだいがつ張り合って読み楽しみました。遂にはみんなの手でポロポロに、次は父の書棚に手を伸ばす。昔の文学全集はルビ付きで小学生にも読め、何でも分かった気になり、中学校で文学部の人が話している漱石、谷崎等には興味無し。後に読書会に参加した時に、気を入れて再読しました。引越した近所で見えた「金澤文庫」の書体は、日本史の教科書そのままでした。日本最古の図書館です。多くの文書が散逸した今は、日本世の文化を展示する博物館です。(Y・S)



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)の自己紹介

起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

活動は3つのブロックで行っています。★関東ブロック(関東以北の地域)★中部ブロック(名古屋周辺地域)★関西ブロック(大阪周辺と西の地域)です。

活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最近では関東が『春夏秋冬』、関西が『種を蒔く3号』を発行しました。また Web 上にホームページを開いています。(URL <http://jcp.daa.jp>)

◎「あかし文章」に関心のある方はこの誌のトップ頁、またはHPのアドレスをご活用ください。関東、関西は隔月に例会を開いて集まっています。案内はHPに掲載します。なお本誌「文は信なり」は関東ブロックが年2回ほど発行しています。HPにも掲載します。